様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(B)）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８ＫＫ０００４

研究課題名（和文）日独近代化における〈国民文化〉と宗教性―学際的・国際的共同研究基盤の強化

研究課題名（英文）"National Cultures" and Religiosity within the Prosess of Modernization in Germany and Japan

研究代表者
前田　良三（Maeda, Ryozo）

立教大学・名誉教授・名誉教授

研究者番号：９０１５７１４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は1870年代から1930年代の日独における多様な「国民文化」概念の成立と展開のなかで伝統的宗教に由来する宗教性（religiosity）が果たした機能を、宗教学、思想史、ドイツ文学・文化、日本学にまたがる学際的視点から、また海外の研究者との国際的共同研究を通じて多角的に解明することを主目的とし、支配的宗教伝統（制度化したキリスト教会とキリスト教的宗教文化、仏教および神道）の構成要素が近代的「国民文化」をめぐる文化的・学問的・政治的運動と言説に如何なる形態で受容され、またそれら近代の「世俗的」言説が伝統的宗教の新たな自己理解にどのような逆作用を及ぼしたかを明確化することを目指した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、近代的宗教性の特質を、伝統的・制度的宗教の外部の世俗的諸分野への流出・転移という観点から捉え、「宗教」対「世俗」という二分法および「近代化」＝「脱宗教化・世俗化」という従来の近代化論の枠組み、さらには「ポスト・ポスト宗教」という現代社会論の図式を批判的に問い直しており、日独の近代化をめぐる議論に新たな視点を導入するものであり、その社会的意義は大きい。
また、これまで十分に論じられてこなかった多くの事例・対象に光を当てることにより、学問・文化における宗教性の受容と変容の多様な実態を解明した。本研究は日独の宗教的・文化的近代化をめぐる議論の精緻化に寄与するものであり、その意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：Various concepts of modern national culture were generated in the formation and development of the German and Japanese nation state since the 1870's. Within this process of conceptualization of national cultures, religious systems offered models for cultural orientation and political justification, and thus obtained great relevance in this social upheaval. The aim of the research project is to clarify the diverse functions of religiosity within the process of the formation of national culture concepts in Germany and Japan from a cultural studies and comparative religion perspective. A central focus of this interdisciplinary investigation lies on the transfer of the religious elements into secular discourses and movements, as well as on the transformation of originally religious concepts and elements in literature, philosophy, cultural theory, the arts, academia and sciences in Germany between 1870 and 1930 in contrast to comparable phenomena in Japan.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：Vagierende Religiositaet　ドイツ民族主義宗教運動　日本のドイツ文学研究と宗教性　Geistesgeschichte　日本建国神話と儒教　人種概念と国民概念　20世紀の視覚文化　ドイツ民衆教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の背景となったのは、日独の近代化をめぐる最近の議論における「政治」から「文化」への視点の移行、ならびに「国民文化」と「近代的宗教性」の関係への着目である。

（１）1980 年代以降、近代的「国民」が所与の実体ではなく「国民国家」成立とともに政治的に構築されたものであるという認識が歴史研究において広く共有される一方、そうした「国民」の政治的統合が文化的に統合された「国民」という表象の成立と不可分であるという視点が提示された（例えば Benedict Anderson: Imagined Communities, 1983）。「国民」を巡る歴史学・社会学の議論における「政治」から「文化」へのこうした視点の移行に伴い「国民文化」が研究テーマとして新たな重要性を獲得するに至った。

（２）一方宗教史研究では、近代の社会変動期において、制度化された宗教の周縁およびその外部に発生した社会的･文化的革新運動が､自己の方向づけと正当化のモデルをしばしば｢宗教性｣に求めてきた点に関心が向けられるようになった。それらの運動は典礼上の行為規範も含む宗教的言説形式とその説得力に依拠しつつ、みずからが提示する新たな社会モデルや文化の構想に普遍的拘束力を付与することを狙うとともに、既存の価値体系のみならず伝統的組織形態やコミュニケーション形式との結びつきをも確保しようとした。19 世紀後半のドイツ及び日本における国民国家成立期にも、互いに競合する多様な「国民文化」構想が既存宗教の構成要素を取り込んで成立している。「世俗的」諸分野への「宗教性」のこうした転移現象（transfer）は、既に世紀初頭にヘーゲルによって自然・歴史の聖化および宗教の自然化・歴史化として捉えられていたが、「近代」の確立とともに政治や文化を宗教システムから独立した領域として考察する近代化論が支配的となり、その枠組みの内部ではこうした転移現象は「政治宗教」や「芸術宗教」、あるいは「公共圏における宗教」などの必ずしも分析的とは言えない概念によって説明され、宗教は非宗教的現象を解明する際に精々比較の対象として引き合いに出されるにすぎなかった。

（３）これに対し、こうした転移現象そのものを近代に固有の宗教性の表出と捉えようとする動きがヨーロッパ近代史の分野で現れてきた。特にニッパーダイによって提唱された「彷徨する宗教性（vagierende Religiosität）」概念は、ヴィルヘルム期ドイツにおける多様な革新運動を、近代国民国家の成立という歴史的前提のもと、文化的意味での「国民」形成を目指す試みとして捉え直すための重要な一視点を提供し、「近代」それ自体の宗教的性格（それは同時に、この時期の「宗教性」の近代的性格でもある）を解明するための理論的視座を指し示している（Thomas Nipperdey: Religion im Umbruch. Deutschland 1870–1918, 1988）。

２．研究の目的

本研究の目的は、日独の近代化過程で誕生した「国民文化」諸概念を「彷徨する宗教性」の観点から検討することにより、従来の近代化論のみならず、2000 年代以降の「ポスト世俗化」論においても前提とされている「宗教」と「世俗」の二分法という思考機制を批判的に問い直すとともに、「国民文化」の役割を手がかりに、日独の近代化を比較・対照し、「近代」の多元的性格を解明し、ひいては「ポスト近代」という概念化の中に隠蔽されている思考論理を明らかにするためのより包括的な視座を獲得することにある。研究目的の核心は以下の「問い」の解明である。

（１）19 世紀末からナチズム体制に至る時期のドイツにおいて、精神的・文化的・宗教的改革をめざしたさまざまな運動、とりわけフェルキッシュ（völkisch、民族主義）宗教運動、生改良（Lebensreform）運動、文化学における精神史（Geistesgeschichte）運動、ヘーゲル主義と新カント派の克服の試みに端を発する文化哲学運動、教育改革・民衆教育運動および芸術改革運動の提唱する「固有の文化（自文化）」構想がいかなる内実をもち、伝統宗教（ローマ・カトリック教会とプロテスタント諸教会）に由来する宗教性が、それらの「国民文化」運動と言説とのいかなる相互形成のプロセスの中におかれ、一方が他方にどのように流入し、組織化・形態化の原理として、どのような機能を果たしているか。

（２）同時期の日本において、急激な近代化＝西洋化に対抗して生まれた民間の国民文化運動、国文学・民俗学の日本文化論、農本主義の社会運動、および幕末以降の民衆宗教運動によって提唱された「国民文化」が、伝統宗教（仏教、神道）の要素をどのように変容をさせつつ、同時にそのように近代的に変容させられた宗教的要素をいかなる言説を用いてまさに「伝統宗教」として表象しようとしているか。

（３）日独の近代化におけるこれらの現象を統一的視点から比較対照するために、従来用いられてきた記述概念・分析概念はどのように再定義されるべきか。

（４）Ｓ･アイゼンシュタットが説くように､「近代」の複合的･多元的性格（multiple modernities）が、一方で自文化の宗教的模索としての「近代性」（ドイツ）において、他方で西洋化後の脱西洋化あるいは西洋化への抵抗手段としての宗教的「近代」（日本）において、どのような具体相において現れているのか。

３．研究の方法

本研究の方法は「学際的・領域横断的アプローチ」と「国際研究協力」を特徴とし、歴史的事象

の個別研究と理論的考察の両面から上記の「問い」の解明をめざしている。
（１）日独の近代化する社会における「宗教性」と「国民文化」の関係に、宗教史研究内部からの視点のみならず、ドイツ文学・文化研究、思想史研究、日本学にまたがる学際的・領域横断的な視点からアプローチし、具体的な個別事象を手掛かりにその多型性・複層性を明らかにするために、本研究は① 前田良三（研究代表者、ドイツ文学・文化、メディア文化史）、② 久保田浩（研究分担者、宗教学、ドイツ宗教史）、③ 深澤英隆（研究分担者、思想史、ドイツ宗教思想）、④ 小柳敦史（研究分担者、思想史、ドイツ宗教思想）、⑤ シュルーター智子（研究分担者、宗教学、ドイツ宗教文化史）、⑥ ダーヴィッド・ヴァイス（研究分担者、日本学、神話研究、近代日本思想史）をメンバーとする研究チームを組織した。また、研究期間中に開催したワークショップならびに研究会においても、ドイツ文学・文化、ヨーロッパ文学、経済史、哲学、教育学・図書館情報学などの分野から若手研究者を積極的に講師として招き、研究対象へのアプローチの視野のさらなる学際的拡大を試みた。さらに、分析対象を文書資料に限定せず、特に視覚文化における宗教的イメージにも分析の範囲を拡げ、テクスト解釈に加えて図像分析・イメージ分析、さらにはメディア文化史の記述方法を組み合わせた。
（２）こうした学際性・領域横断性とならび、本研究は国際的な研究協力体制の構築・推進を方法上の特徴とする。国際共同研究の海外拠点となったテュービンゲン大学日本学研究所（Robert Horres 氏、Klaus Antoni 氏、Monika Schrimpf 氏）に加え、ベルリン・フンボルト大学付属森鷗外記念館（Harald Salomon 氏）、同大学美術史研究所（Kai Kappel 氏）、ボン大学ドイツ文学研究所（Jürgen Fohrmann 氏）、ミュンヘン大学プロテスタント神学研究所（Friedrich Wilhelm Graf 氏）、ミュンヘン・美術史研究センター（Christian Fuhrmeister 氏）、フランクフルト大学日本学科（Lisette Gebhard 氏、Michael Kinski 氏）をはじめとするドイツ各地およびチェコ、オーストリア、オランダ、アメリカ合衆国の諸研究機関の協力を得て、研究代表者・分担者は研究資料の系統的かつ重点的な調査・収集に従事した。
（３）さらに研究成果の発表（学術論文集）にはアメリカ合衆国（Erin L. Brightwell 氏、Katharina Gerstenberger 氏、Rolf J. Goebel 氏）、オーストラリア（Axel Fliethmann 氏、Tim Mehigan 氏）、韓国（Yun-Young Choi 氏、Jeong Hwa Choi 氏）などの研究者も共著者として参加している。これらの学術論文集においては日本におけるドイツ研究と海外における日本研究という「外部の視点」からのアプローチが意識的に試みられており、人文研究における「本国対外国」、「中心対周縁」および「西洋対非西洋」という伝統的二分法の克服と、従来の国際協力研究のありかたの新たな組み換えが方法論的にも試みられている。

４．研究成果
（１）本研究の実証的・歴史的研究の中核をなすのは、日独の近代化の過程で伝統宗教の諸要素が宗教外部の国民文化運動と言説にいかに流出・転移しているかを、資料の調査・収集・分析に基づき可能な限り具体的に記述し考察することである。海外で行った資料調査・収集のテーマ、研究機関等は以下の通りである。
① 前田良三「20 世紀初頭のドイツ人文学における精神史的研究の展開およびヴァイマルにおけるゲーテ・シラー・アルヒーフとニーチェ・アルヒーフの設立」（テュービンゲン大学、ボン大学、平成 30 年度）、「日独国民文学のカノン化過程における宗教的要素と文献学の関連」（ベルリン・フンボルト大学、ハンブルク大学、ボン大学、令和 1 年度）、「ミュンヘン・美術アカデミーの歴史とナチス美術における宗教性・神話性」（ミュンヘン・バイエルン国立図書館、美術史研究センター（Zentralinstitut für Kunstgeschichte）、ピナコテーク、令和 4 年度）、「世紀転換期ウィーン美術界のアカデミズムと反アカデミズムにおける宗教性」（ウィーン・美術史博物館、アルベルティーナ美術館、令和 5 年度）。
② 久保田浩「プロテスタント自由主義神学者ならびに保守主義神学者の著作、教会関連機関誌における「国民」「民族」概念」（ハイデルベルク大学、令和 1 年度）、「ナチズムによるシンティ＝ロマ人に対する差別と排除に見られる「人種」「民族」概念」（テレジーン・イニシアチブ研究所（Institut Terezínské iniciativy）、ユダヤ博物館付属文書館（Archiv Židovského muzea v Praze, Praha/Smíchov）、テレジーン記念館（Památník Terezín）令和１年度）。
③ 深澤英隆「フィドゥスの芸術活動および生改良運動」（ベルリン・ギャラリー、ヴォルタースドルフ郷土博物館、平成 30 年度）、「ドイツ・ナショナリズム運動と視覚文化の相関」（バイエルン国立図書館、ハイデルベルク大学、令和１年度）、「20 世紀日独の視覚文化・大衆文化における宗教性の視覚化」（フランクフルト大学、令和１年度）。
④ 小柳敦史「19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのドイツ民衆教育・国民教育・社会教育学」（テュービンゲン大学、平成 30 年度）、自由主義プロテスタント神学と国民文化の関係）（ミュンヘン大学、平成 30 年度）、「ワイマール期ドイツ保守革命運動における民衆教育、国民教育の基礎資料研究」（北海道大学、令和 1 年度）、「ドイツのリベラル・プロテスタンティズムが近代ドイツ社会において果たした役割」（ベルリン自由大学、令和 4 年度）。
⑤ シュルーター智子「ドイツにおける新渡戸稲造の活動、および近現代ドイツにおける薔薇十字運動とその系譜」（ハレ大学、バイロイト大学、テュービンゲン大学、アムステルダム・リトマン・ライブラリー（ヘルメス主義哲学文庫）、平成 30 年度）、「新渡戸稲造の東西文化媒介言説における宗教性および薔薇十字運動におけるユートピア思想」（テュービンゲン大学、令和１年度）。

⑥ ダーヴィッド・ヴァイス「儒教と日韓の建国神話の関連」（ハーバード大学、令和 1 年度）、「岡正雄の日本民族形成論におけるウィーン学派の影響」（ウィーン大学、令和 4 年度）。

海外諸機関におけるこれらの資料調査・収集を通じて、海外共同研究者・研究協力者のネットワークの拡大と密接なコミュニケーション回路の確立を実現することができた。「学際的・国際的共同研究基盤の強化」という本研究が掲げた目標は、この点において大きな成果をあげたと判断する。ただし、当初の研究計画では、研究期間中毎年研究代表者・分担者全員が海外での資料調査・研究を行うことにしていたが、新型コロナウイルスの世界的感染拡大により令和 2 年度・3 年度の海外渡航が不可能となったため計画の大幅な変更を余儀なくされた。この２か年は、海外で所在が確認されている資料は可能な限りオンラインを通じてアクセスし電子ファイル形式での収集に努める一方、主として平成 30 年度、令和１年度に集中的に調査・収集した資料にもとづき、上記「２．研究の目的」に記した個別的な「問い」に関する分析・考察を行った。

（２）研究代表者・分担者が行った個別研究の主要な成果のうち、すでに口頭発表および論文・著書として発表されたものを中心に概要を記す。

① 前田良三（a）「20 世紀初頭のドイツにおける精神史的文学研究と宗教性、日本の外国文学研究における宗教性と日本文化の関係」：ゲオルゲ・クライス（George-Kreis）に属する文学研究者フリードリヒ・グンドルフ（Friedrich Gundolf）の著作ならびにゲオルゲ・クライスの活動に関する資料の分析を行い、グンドルフやエルンスト・ベルトラム（Ernst Bertram）の著作がルドルフ・オットー（Rudolf Otto）によって神話体験・宗教体験の核心として定式化された「ヌミノーゼ Numinose」（畏怖）に基づく文学・思想研究という側面を持っていることを明らかにした。一方そうした「神話的半神」崇拝は詩人ゲオルゲに特徴的なローマ・カトリック的宗教性（典礼性、身体性）と容易に融和しがたい要素を持つ点も確認した。さらに 19 世紀後半から 20 世紀前半のドイツにおける文学・芸術言説において、「ゲーテ体験」（ディルタイ）あるいは「原現象ゲーテ」（ジンメル）をはじめとして宗教性を帯びた崇拝の対象としてのゲーテ像が成立・確立しており、この現象も当時のドイツ教養市民層における宗教性の文学・芸術受容への転移という視点から再検討すべきであるという認識を得た。また、ジンメルやグンドルフのゲーテ論に影響をうけた日本のドイツ文学者木村謹治においては、ドイツにおけるこうした神話的・宗教的ゲーテ崇拝を受けてゲーテの仏教的受容が行われていると同時に、その背景に当時の青年知識人層における近角常観など浄土真宗系宗教家の影響が存在することを確認した。さらに、こうした近代日本の「国民文化」構想における西洋文化の受容と日本的宗教性の結合は、日本における「彷徨する宗教性」の観点から、西洋文化移入とそれに対する抵抗手段としての伝統宗教文化との両義的関係という、外国文学受容研究を超えたより広範な文化史的文脈において考察されるべき現象であるという認識を得た。(b)「ナチス美術におけるドイツ美術アカデミズムの伝統と宗教性」：ミュンヘン美術アカデミーおよびナチスによって開催された「大ドイツ美術展」（Große Deutsche Kunstausstellung=GDK）に関する資料の分析に基づき、ナチス美術においては「ドイツ的」ないし「アーリア的」な文化・人種のイメージが「北方ルネサンス」および 19 世紀のドイツ・アカデミズム絵画の描写技法的・メディア的特性（三連祭壇画・写実的ロマン主義等）の恣意的な借用によって視覚化されていることを、ナチス芸術体制の中心人物の一人である画家アドルフ・ツィーグラー（Adolf Ziegler）の作品に即して明らかにし、ナチス美術において主題化される「ドイツ性」の表現が伝統的「職人文化」と「職人的技術」に対する民衆（Volk）の宗教性を帯びた感情と密接に関係していることを指摘した。この意味において、ナチス美術も「彷徨する宗教性」という側面からさらに考察すべき対象であるとの結論を得た。

② 久保田浩（a）「ドイツ民族主義運動に流出した伝統的宗教の諸要素とその変容」：ドイツ民族主義宗教運動において伝統的宗教と近代的学問（宗教学）の諸要素がいかに変形・変容されつつ取り入れられているかという問題に関して、「ナザレのイエス」表象に着目し、その表象がドイツ的キリスト教の立場で説かれる場合と反キリスト教的民族宗教運動で主張される場合の共通性と差異性を分析し、後者の代表的運動であるマティルデ・ルーデンドルフ（Mathilde Ludendorff）を中心とするルーデンドルフ運動において、「ナザレのイエス像」をめぐる言説が学問としての「宗教史」の成果を「擬似学問」的に変形して受容することによって編成されている実態を明らかにした。(b)「1930 年代・40 年代のドイツにおける「国民」および「民族」概念」：「民族」及び「国民」概念の意味論的変遷を、18 世紀末のドイツ・ロマン派の文化論に遡って検証するとともに、支配的宗教伝統と対立的でありつつ親和的であると捉えられた「ハイデ Heide」（異教徒・ペイガン）概念に着目し、自文化の自己同定のメカニズムを解明した。この作業を踏まえ、フェルキッシュ運動の唱える「民族共同体」における「女性性」と「母性」の問題を、「フェルキッシュ・フェミニズム」の代表的存在であるゾフィー・ロッゲ・ヴェルナー（Sophie Rogge Börner）に焦点を当てて考察し、バッハオーフェンの「母権論」に一つの源泉をもつ母権制と近代社会批判の系譜が、男女平等・同権の主張とフェルキッシュ・イデオロギーとの結合に帰結してゆく経緯を、とくにエルンスト・ベルクマン（Ernst Bergmann）の母権的「国民教会」構想との対立を軸に明らかにした。

③ 深澤英隆（a）「世紀転換期から戦間期のドイツ思想運動における宗教性」：ルートヴィヒ・クラーゲス（Ludwig Klages）の弟子および信奉者からなる思想集団「生命中心主義研究サークル」（Arbeitskreis für Biozentrische Forschung=AKBF）に着目し、その中心人物の一人であるハンス・ケルン（Hans Kern）の著作資料分析にもとづきその運動史とその思想内容の展開を跡づけ、これまでほとんど知られてこなかったこの運動体が、民族主義と反ユダヤ主義を基調とする典型

的な知識人宗教の集団であり、その成立から解体に至るまで、ナチ政権との強い緊張関係のもとにあったことを明らかにした。(b)「ドイツ民族主義宗教運動における視覚化された宗教性」：ロマン派の周辺で懐胎された「芸術宗教」の理念がドイツ国民主義の美学的表現において宗教芸術へと再転換し、国民主義の宗教的基礎づけに結びつくプロセスを、とくにルートヴィヒ・ファーレンクローグ（Ludwig Fahrenkrog）およびフィドゥス（Fidus=Hugo Höppener）の事例に即して考察した。さらにドイツにおけるナショナリズムの動向と視覚文化との関わりを、民族主義（フェルキッシュ）運動家・画家であるヘルマン・ヘンドリッヒ（Hermann Hendrich）を対象に考察した。この研究では、英語圏で盛んに議論されている宗教的視覚文化・物質文化論の議論をも参照しつつ、ヘンドリッヒの宗教絵画および宗教建築の検討を行い、ゲルマン的宗教性への強い志向を示す彼の建築作品が、宗教的視覚文化・物質文化の典型例となっている一方で、ポピュラー・カルチャーに属する視覚的図像やオブジェがもつ「視覚的敬虔」（visual piety）を広く喚起するものとはなっておらず、その特質は古代以来の実態的ドイツ性の存続・現存を一般に知らしめるという構想にあることを確認した。

④ 小柳敦史 「ドイツ民衆文化・民衆教育およびフェルキッシュ文化運動における宗教性」：宗教性とナショナリズムを反映する「暦法」と「紀年法」の組み合わせとして、19 世紀後半からナチス時代に至るドイツの「カレンダー」に着目し、調査・収集した資料に基づき 16 世紀以降のヨーロッパにおけるカレンダーの機能の変遷を跡づけた。その上で、近代のカレンダーのなかでも日付表示に添付された図像（および文言）が特定の傾向に役立つことを意図する「傾向カレンダー」（Tendenzkalender）のジャンルに着目し、宗教的・教化的な日めくりカレンダーの機能を分析した。その結果として、フェルキッシュ宗教運動では、Kalender という外来語が忌避され「時しるべ」（Zeitweiser）という語が用いられたこと、「フェルキッシュ紀年法」と呼べるものが提案されていたことが確認された。また、「フェルキッシュ紀年法」を提案している例として、アドルフ・クロル（Adolf Kroll）による「ゲルマン暦」（Das germanische Jahr）を分析し、その特質が合理的（＝合法則的）に設定された暦法にゲルマン民族的およびドイツ・ナショナリスティックな意味を与えたところにあり、旧来のラテン的・キリスト教的要素を批判した上で、ゲルマンおよびドイツの「伝統」に由来する意味を再充填するフェルキッシュの戦略が確認できるとの仮説的結論を導いた。

⑤ シュルーター智子 (a)「近代日本における西洋的宗教性を媒介とした国民文化論の構想」：西洋の宗教性に媒介された近代日本の「国民文化」の自己規定という問題に関して、新渡戸稲造における西洋と日本の「媒酌」・「通訳」としての活動を考察した。滞米時代にクエーカーとしての宗教的自己を確立した新渡戸の『武士道』をはじめとする日本文化論の著作は、アメリカとドイツの当時の文化論に流入していた宗教性に対する新渡戸の関心に由来する側面をもち、宗教性を強く帯びた新渡戸の「国民文化」構想は、そこで想定されている欧米の読者の「彷徨する宗教性」にアピールするものであったという解釈の可能性を示した。(b) 20 世紀前半における「薔薇十字運動」の再評価：薔薇十字団（Rosenkreuzer）の伝説的な始祖クリスチャン・ローゼンクロイツ（Christian Rosenkreuz）からインスピレーションを得たルドルフ・シュタイナー（Rudolf Steiner）の著作を分析し、シュタイナーによるローゼンクランツ理解の特徴とその宗教史的な意味を解読した。その結果、シュタイナーが描くローゼンクランツは、言わば二次創作というべき側面をもつこと、シュタイナーが薔薇十字団について積極的に論じた時期が、神智学協会ドイツ支部のリーダーとなった後、シュタイナー自身が人智学協会を設立することになる時期と重なっており、また彼の記述があくまでも西欧に活動の基盤を置き、「真のキリスト教」とその「キリスト」に強く結びついている点を確認した。

⑥ ダーヴィッド・ヴァイス (a)「日本近世・近代における国民文化と古代神話の受容・政治的利用・民衆への普及」古事記や日本書紀に記された古代神話が近世・近代の日本人の集合的自我認識かつ他者認識の形成において果たした役割を、アマテラスの弟スサノオが近代日本の日鮮同祖論の中でどのように扱われたか、また江戸時代の儒者によって天皇家の始祖と見なされた古代中国の伝説的人物呉太伯が日本人のアイデンティティー形成においてどのような役割を果たしたかという問いに焦点を当てて分析した。(b)「近代日本の学界におけるドイツ語圏の民族学・比較宗教の影響」事例として、神話はもともと自然現象を表したという明治時代の日本比較神話学に見られる仮設とフリードリヒ・マックス・ミュラーやカール・フローレンツとの繋がりを分析するとともに、岡正雄の日本民族形成論に見られるヴィーン学派の影響を、岡が 1930 代前半ヴィーンで書いた博士論文に焦点を当てて分析した。

（３）国際共同研究の成果（論文集）の刊行

① 研究分担者、海外共同研究者・研究協力者が学術論文集 Wissen über Wissenschaft: Felder – Formation – Mutation（Stauffenburg）に共同研究の成果を寄稿・出版した（2021 年）。

② 海外共同研究拠点機関であるテュービンゲン大学との緊密な共同作業により、本研究の成果の一部を研究代表者が編集し研究分担者、海外研究協力者が寄稿した論文集『彷徨する宗教性と国民諸文化――近代化する日独社会における神話・宗教の諸相』（勉誠社）として刊行した（2024 年）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計13件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 久保田浩	４．巻 55
２．論文標題 「ドイツ的キリスト者」運動と近代宗教史―ナチズム期ドイツ・プロテスタンティズム史叙述再考のための一試論―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 明治学院大学キリスト教研究所紀要	６．最初と最後の頁 97-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小柳敦史	４．巻 41
２．論文標題 エルンスト・トレルチの宗教社会主義	５．発行年 2022年
３．雑誌名 基督教学研究	６．最初と最後の頁 79-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Atsushi Koyanagi	４．巻 29
２．論文標題 Tetsutaro Ariga and Christian Studies at Kyoto University after World War II	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Journal for the History of Modern Theology / Zeitschrift fuer Neuere Theologiegeschichte	６．最初と最後の頁 69-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 David Weiss	４．巻 31
２．論文標題 Izumos Funktion in Japans politischer Mythologie. Peripherie und Gegenbild	５．発行年 2022年
３．雑誌名 OAG Notizen	６．最初と最後の頁 10-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ryozo Maeda	4．巻 53
2．論文標題 Stefan Keppler-Tasaki: Wie Goethe Japaner wurde. Internationale Kulturdiplomatie und nationaler Identitaetsdiskurs 1889-1989.	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Jahrbuch fuer Internationale Germanistik	6．最初と最後の頁 223-225
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 肖蘭、シュルーター智子、高橋彩	4．巻 28
2．論文標題 伴走的キャリア支援による自律した若者の育成の取り組みー北海道大学新渡戸カレッジの事例ー	5．発行年 2021年
3．雑誌名 高等教育ジャーナル	6．最初と最後の頁 57～63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 ヴァイス　ダーヴィッド	4．巻 54
2．論文標題 神国の境界ースサノオと日猶同祖論についてー	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Aspekt	6．最初と最後の頁 3～11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ryozo Maeda	4．巻 53
2．論文標題 Stefan Keppler-Tasaki: Wie Goethe Japaner wurde. Internationale Kulturdiplomatie und nationaler Identitaetsdiskurs 1889-1989	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Jahrbuch fuer Internationale Germanistik	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 シュルーター智子	4．巻 54
2．論文標題 ミルチャ・エリアーデ『アルカイック宗教論集　ルーマニア・オーストラリア・南アメリカ』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『基督教学』	6．最初と最後の頁 25～28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ryozo Maeda	4．巻 17
2．論文標題 Einleitung zum Sonderthema: Analogie: Ahhnlichkeitsdenken in Literatur und Kultur	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Neue Beitraege zur Germanistik	6．最初と最後の頁 7～14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ryozo Maeda	4．巻 17
2．論文標題 Sprache, Mythos und Analogie. Zum Aehnlichkeitsdenken bei Walter Benjamin und Ernst Cassirer	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Neue Beitraege zur Germanistik	6．最初と最後の頁 83～104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 シュルーター智子	4．巻 54
2．論文標題 書評ミルチャ・エリアーデ『アルカイック宗教論集　ルーマニア・オーストラリア・南アメリカ』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 基督教学	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 前田良三	4．巻 31
2．論文標題 田邊恵子：一冊の、ささやかな、本　ヴァルター・ベンヤミンの『一九〇〇年ごろのベルリンの幼年時代』研究（みすず書房2023年）	5．発行年 2024年
3．雑誌名 ワセダ・ブレッター	6．最初と最後の頁 34-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計48件（うち招待講演　11件／うち国際学会　12件）

1．発表者名 前田良三
2．発表標題 「国民文学」としてのゲーテ――ドイツ文学者木村謹治の場合
3．学会等名 「日独近代化における〈国民文化〉と宗教性――学際的・国際的共同研究基盤の強化」 2022年度第2回研究会
4．発表年 2023年

1．発表者名 前田良三
2．発表標題 《アナロジー的人間》――エルンスト・カッシーラーの文化哲学と類似性思考
3．学会等名 ディルタイ協会（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Ryozo Maeda
2．発表標題 Klassik / Koten: Wie ein westlicher Begriff auf die japanische Literaturgeschichtsschreibung transportiert wurde
3．学会等名 Symposium: Kanonbildung in der Literatur. Deutschland, Japan und Oesterreich（招待講演）
4．発表年 2022年

１．発表者名 Ryozo Maeda
２．発表標題 Eisenbahn, Metro, Mobile Cities: Berlin und Paris in der japanischen literarischen Reportage der Zwischenkriegszeit
３．学会等名 (Ver-)Fahren. Poetik und Mobilitaet, Internationales Symposium, Universitaet Innsbruck（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Ryozo Maeda
２．発表標題 "Handwerk", Ideologien, Nationalkultur. Die NS-Kunst und Cool Japan in kultur- und mediengeschichtlichen Kontexten
３．学会等名 Online-Ringvorlesung der Universitaet Bonn, Universitaet zu Koeln und des Japanischen Kulturinstituts Koeln（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 久保田浩
２．発表標題 「ドイツ的キリスト者」運動史再考－個別宗教史叙述の再検討－
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 シュルーター智子
２．発表標題 クリスチャン・ローゼンクロイツの原像
３．学会等名 北海道基督教学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 シュルーター智子
２．発表標題 クリスチャン・ローゼンクロイツと R.シュタイナー
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 シュルーター智子
２．発表標題 近代薔薇十字運動におけるクリスチャン・ローゼンクロイツ
３．学会等名 「日独近代化における〈国民文化〉と宗教性――学際的・国際的共同研究基盤の強化」 2022年度第1回研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 川谷維摩、シュルーター智子
２．発表標題 大学初年次における課題解決型演習の実践
３．学会等名 大学教育学会2022年度課題研究集会
４．発表年 2022年

１．発表者名 深澤英隆
２．発表標題 知識人宗教の運命:ナチ政権下のクラーゲス・クライス
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 David Weiss
２．発表標題 Comparative Mythology and Culture Circles: The Impact of German-Language Scholarship on the Study of Japanese Myth
３．学会等名 24th Asian Studies Conference Japan（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 David Weiss
２．発表標題 Hybride Kulturschichten: Oka Masao und die Wiener Schule der Ethnologie
３．学会等名 18. Deutschsprachiger Japanologentag（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Ryozo Maeda
２．発表標題 Itineration des Unuebersetzbaren: Celan und die Uebersetzung der modernen Lyrik in Japan
３．学会等名 Internationale Vereinigung fuer Germanistik（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 前田良三
２．発表標題 ナチス絵画をめぐって
３．学会等名 日本フンボルト協会関東甲信越支部（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 久保田浩
２．発表標題 公共圏における宗教知の構築ー近代ドイツの霊媒裁判を事例にー
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 久保田浩
２．発表標題 「民族共同体」における女性性と母性 ―フェルキッシュ・フェミニズムの諸相―
３．学会等名 ワークショップ「日独近代化における〈国民文化〉と宗教性」
４．発表年 2022年

１．発表者名 深澤英隆
２．発表標題 セッション「自然と霊性――エルンスト・ブロッホの思弁哲学」コメント
３．学会等名 社会思想史学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 深澤英隆
２．発表標題 パネル『エラノスという交差点』コメント
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 深澤英隆
２．発表標題 ナチ政権期におけるBiozentrismusの問題―Hans Kernをめぐって
３．学会等名 ワークショップ「日独近代化における〈国民文化〉と宗教性」
４．発表年 2022年

１．発表者名 小柳敦史
２．発表標題 ナショナル＝フェルキッシュな暦法の試み
３．学会等名 ワークショップ「日独近代化における〈国民文化〉と宗教性」
４．発表年 2022年

１．発表者名 シュルーター智子
２．発表標題 J.V.アンドレーエにおけるキリスト教結社の構想
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 David Weiss
２．発表標題 Changing Topographies of the Alien: The Shift from ikai to ikoku in Depicting Spaces Outside Japan in Medieval Mythology
３．学会等名 The European Association for Japanese Studies（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 ヴァイス、ダーヴィッド
２．発表標題 「岡正雄と民族学における日独交流」
３．学会等名 ワークショップ「日独近代化における〈国民文化〉と宗教性」
４．発表年 2022年

１．発表者名 シュルーター智子、肖蘭、高橋彩
２．発表標題 キャリア教育におけるポートフォリオシステムの活用ー北海道大学「新渡戸カレッジ」の取り組みを例にー
３．学会等名 大学教育研究フィーラム
４．発表年 2021年

１．発表者名 畑中貴美、シュルーター智子、内田治子
２．発表標題 同窓生との連携による課題解決型演習を支える学生支援員の役割と課題ーZoomによる同時配信授業を中心とした取り組みについてー
３．学会等名 大学教育研究フォーラム
４．発表年 2021年

１．発表者名 Maeda, Ryozo
２．発表標題 Analogisierung ohne Kontextualisierung? Geburt des modernen Japan-Diskurses aus der deutsch-japanischen Analogie
３．学会等名 Asiatische Germanistentagung（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Maeda, Ryozo
２．発表標題 Gleichschaltung oder eigener Weg? Germanistik in Kyoto in der Konstellation des Kulturdiskurses der spaeten 1930er Jahre.
３．学会等名 Deutsch-Asiatischer Studientag（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Maeda,Ryozo
２．発表標題 "Unsinnliche Aehnlicikeit". Zu einer Denkfigur der Sprach- und Erkenntnistheorie Walter Benjamins
３．学会等名 GIP-Konferenz（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 久保田浩
２．発表標題 宗教的ユートピアの構想－近代ドイツの政治的文脈において
３．学会等名 日本宗教学会第78回学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 シュルーター智子
２．発表標題 新渡戸稲造が描いた「西洋」と「日本」―近代宗教史の一断面―
３．学会等名 北海道基督教学会第 58 回学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 シュルーター智子
２．発表標題 アンドレーエ『クリスティアノポリス』の理想と現実
３．学会等名 日本宗教学会第 78 回学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Weiss, David
２．発表標題 Blurring Identities: Susanoo and the Ideological Incorporation of Koreans into the Japanese Family State.
３．学会等名 Third EAJS Conference in Japan（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Weiss,David
２．発表標題 From Universal Confucian World Order to Modern Nation State: Japanese and Korean Founding Myths, 17th to 20th Century.
３．学会等名 Myth, Language, and Prehistory: A Celebratory Conference in Honor of Prof. Michael Witzel（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Maeda, Ryozo
２．発表標題 Epochenbegriffe der nationalen Literaturgeschichtsschreibung im Prozess der wissenschaftlichen Modernisierung Japans
３．学会等名 Internationales Literaturstrasse-Symposium 2018: Weltminute und Konstellation（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Maeda, Ryozo
２．発表標題 Materialitaet des Texts vor und nach der digitalen Wende
３．学会等名 Internationales Symposium: Textumgebungen. Kontextologie der Gegenwartsliteratur（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 前田良三
２．発表標題 視覚的〈国民教化〉，動員される性，キッチュ―アドルフ・ツィーグラー『四大元素』―
３．学会等名 立教大学・テュービンゲン大学国際ワークショップ「諸「国民文化」：国際的文脈における日独の視点」（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 久保田浩
２．発表標題 1920・30年代の「オーディン」表象と「アトランティス・北方的」ユートピア―宗教とナショナル・アイデンティティとの関係を巡って―
３．学会等名 立教大学・テュービンゲン大学国際ワークショップ「諸「国民文化」：国際的文脈における日独の視点」（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 久保田浩
２．発表標題 0・プフライデラーにおける「宗教史学」と「宗教哲学」との関係を巡って
３．学会等名 研究会「宗教学の生成期における哲学の位置」
４．発表年 2018年

１．発表者名 深澤英隆
２．発表標題 「芸術宗教」から「宗教芸術」へ：ドイツ民族主義宗教運動における美学的なるもの
３．学会等名 立教大学・テュービンゲン大学国際ワークショップ「諸「国民文化」：国際的文脈における日独の視点」
４．発表年 2019年

１．発表者名 深澤英隆
２．発表標題 脱伝統の可能性と不可能性：ジンメル宗教論の諸相
３．学会等名 京都ユダヤ思想学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Weiss, David
２．発表標題 Founding Myths of the Japanese State: The Changing Perception of China and its Influence on Early Modern Japanese Identity
３．学会等名 国際研究フォーラム「アジアの宗教文化―モダニティの中での総合変容」
４．発表年 2018年

１．発表者名 Weiss, David
２．発表標題 Die Grenzen japanischer Identitaet: Susanoos Rolle in der politischen Mythologie Japans
３．学会等名 ドイツ東洋文化研究協会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 深澤英隆
２．発表標題 「宗教的人間（ホモ・レリギオスス）」／「形而上学的動物（アニマル・メタフュジクム）」としての姉崎正治ー時代の変遷のなかで
３．学会等名 日本ショーペンハウアー協会
４．発表年 2023年

１．発表者名 深澤英隆
２．発表標題 「宗教経験からの論証」の問題圏
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 小柳敦史
２．発表標題 小柳敦史
３．学会等名 日本基督教学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 小柳敦史
２．発表標題 〈魂〉が異なるものの認識―トレルチの歴史哲学から宗教哲学へ
３．学会等名 日本宗教学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Weiss, David
２．発表標題 Close Others and Techniques of Translation: Shinto's Role in Colonizing Korea
３．学会等名 17th International Conference of the European Association for Japanese Studies（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計13件

１．著者名 Aizawa Keiichi, Maeda Ryozo, Mark Speich, Axel Freimuth, Michael Hoch, Ruth Effinowicz, Watanabe Wataru, Matthias Pilz, Claus Kress, Nishitani Yuko, Ide Manshu, Majima Junko, Tsuji Tomoki, Kayo Adachi-Rabe, Hiraishi Noriko, Yamanaka Junko, Aoki Soko, Mishima Ken'ichi, Kimura Goro Christoph, Fujihara Tatsushi	４．発行年 2023年
２．出版社 Iudicium	５．総ページ数 359
３．書名 Gemeinsame Herausforderungen. Ein aktueller Blick auf den deutsch-japanischen Wissenschaftsaustausch anhand von Beitraegen aus den Ringvorlesungen 2021 und 2022	

１．著者名 小柳敦史、江島尚俊、三浦周、松野智章、他	４．発行年 2022年
２．出版社 法藏館	５．総ページ数 474
３．書名 現代日本の大学と宗教	

１．著者名 深澤英隆、森本一夫、井上貴恵、小野純一、澤井真、他	４．発行年 2023年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 680
３．書名 イスラームの内と外から	

1．著者名 前田良三	4．発行年 2021年
2．出版社 みすず書房	5．総ページ数 298
3．書名 ナチス絵画の謎	

1．著者名 David Weiss	4．発行年 2021年
2．出版社 Bloomsbury	5．総ページ数 245
3．書名 The God Susanoo and Korea in Japan's Cultural Memory	

1．著者名 深澤 英隆	4．発行年 2021年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 444
3．書名 ジンメル宗教論集	

1．著者名 David Weiss, Robert Horres, Harald Salomon, Joerg Robert	4．発行年 2021年
2．出版社 Stauffenburg	5．総ページ数 337
3．書名 Wissen ueber Wissenschaft	

１．著者名 前田良三	４．発行年 2021年
２．出版社 みすず書房	５．総ページ数 298
３．書名 ナチス絵画の謎	

１．著者名 高尾 賢一郎、後藤 絵美、小柳 敦史、シュルーター智子	４．発行年 2021年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 370
３．書名 宗教と風紀	

１．著者名 久保田浩、鶴岡賀雄、林淳、深澤英隆、細田あや子、渡辺和子	４．発行年 2020年
２．出版社 リトン	５．総ページ数 480
３．書名 越境する宗教史　上	

１．著者名 久保田浩、鶴岡賀雄、林淳、深澤英隆、細田あや子、渡辺和子	４．発行年 2020年
２．出版社 リトン	５．総ページ数 571
３．書名 越境する宗教史　下	

1．著者名 平藤喜久子、鈴木正崇、臼杵　陽、ベルンハルト・シャイト、クラウス・アントーニ、シルヴィオ・ヴィータ、月本昭男、新免光比呂、深澤英隆、久保田浩、松村一男	4．発行年 2020年
2．出版社 北海道大学出版会	5．総ページ数 290
3．書名 ファシズムと聖なるもの／古代的なるもの（「「表象しえぬ古代」の表象―ドイツ・プレファシズムおける視覚文化」（深澤英隆）、「ナチズム期の〈古代〉表象の形成―H・ヴィルトの〈アトランティス母権制〉論をめぐって」（久保田浩））	

1．著者名 前田良三、久保田浩、深澤英隆、小澤実、齋藤正樹、ダーヴィッド・ヴァイス、クラウス・アントーニ、ミヒャエル・ヴァフトゥカ、チェ・ジョンファ、カーリン・モーザー・フォン・フィルゼック、ビルギット・ヴァイス	4．発行年 2024年
2．出版社 勉誠社	5．総ページ数 247
3．書名 彷徨する宗教性と国民諸文化　近代化する日独社会における神話・宗教の諸相	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	久保田　浩 (Kubota Hiroshi) (60434205)	明治学院大学・国際学部・教授 (32683)	
研究分担者	深澤　英隆 (Fukazawa Hidetaka) (30208912)	一橋大学・大学院社会学研究科・名誉教授 (12613)	
研究分担者	シュルーター　智子 (Schlueter Tomoko) (10825186)	北海道大学・高等教育推進機構・特任助教 (10101)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小柳　敦史 (Koyanagi Atsushi) (60635308)	北海学園大学・人文学部・准教授 (30107)	
研究分担者	Ｗｅｉｓｓ　Ｄａｖｉｄ (Weiss David) (80830273)	九州大学・人文科学研究院・講師 (17102)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	ホレス　ロベルト (Horres Robert)		
研究協力者	アントーニ　クラウス (Antoni Klaus)		
研究協力者	シュリンプ　モニカ (Schrimpf Monika)		
研究協力者	サロモン　ハラルト (Salomon Harald)		
研究協力者	カッペル　カイ (Kappel Kai)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	フォールマン　ユルゲン (Fohrmann Juergen)		
研究協力者	フールマイスター　クリスティアン (Fuhrmeister Christian)		
研究協力者	グラーフ　フリードリヒ　ヴィルヘルム (Graf Friedrich Wilhelm)		
研究協力者	ゲープハルト　リゼッテ (Gebhard Lisette)		
研究協力者	キンスキ　ミヒャエル (Kinski Michael)		
研究協力者	ブライトウェル　エリン (Brightwell Erin)		
研究協力者	ゲルステンベルガー　カタリナ (Gerstenberger Katharina)		
研究協力者	げーベル　ロルフ (Goebel Rolf)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	チェ　ユンヨン (Choi Yun-Young)		
研究協力者	チェ　ジョンファ (Choi Jeong Hwa)		
研究協力者	フリートマン　アクセル (Fliethmann Axel)		
研究協力者	メヒガン　ティム (Mehigan Tim)		
研究協力者	吉田　治代 (Yoshida Haruyo)		
研究協力者	古矢　晋一 (Furuya Shinichi)		
研究協力者	馬場　大介 (Baba Daisuke)		
研究協力者	斎藤　萌 (Saito Megumi)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	田邊　恵子 (Tanabe Keiko)		
研究協力者	ケプラータサキ　シュテファン (Keppler-Tasaki Stefan)		
研究協力者	周　雨霏 (Zhou Yufei)		
研究協力者	阪田　朋紀 (Sakata Tomoki)		
研究協力者	松井　健人 (Matsui Kento)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
7. Deutsch-Asiatischer Studientag Literatur- und Geisteswissenschaften	2021年～2021年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
オーストリア	インスブルック大学			
ドイツ	ベルリン・フンボルト大学	ミュンヘン大学	ボン大学	他4機関
米国	カリフォルニア大学（デーヴィス校）	ユタ大学	ミシガン大学	他3機関
英国	オックスフォード大学	ロンドン大学		

共同研究相手国	相手方研究機関			
オーストラリア	モナーシュ大学	クイーンズランド大学		
韓国	ソウル国立大学			
オランダ	アムステルダム大学			